テモテが親しんできた聖書

テモテへの手紙Ⅱ 3:14～4:5

司祭　ヨハネ 井田　泉

聖霊降臨後第 19 主日

2025 年 10 月 19 日

聖光教会にて

テモテは当時、エフェソという大きな都市とその周辺の教会の責任者でした。エフェソは今のトルコの西海岸に近い所です。エフェソの教会は、かつてパウロが伝道してその基礎を築いた教会です。

エフェソは古くから女神アルテミスを拝む宗教が盛んなところでした。パウロが伝道して、「人間の手で造ったものなどは神ではない」と言ったことがきっかけで、町中に騒動が起こりました。パウロは捕らえられて、集まった群衆が「大いなるかな、エフェソ人のアルテミス」と2時間ほども叫び続ける、という事件があったそうです（使徒言行録 19:23-34)。そういう経緯を経て、エフェソ教会は発展していきました。

ところが今、エフェソ教会には非常な困難が生じています。それは、教会の中に福音を歪曲する人々が強い影響力を持つようになっていることです。たとえば、イエス・キリストの十字架と復活による救いを軽んじる。神よりも金銭や人間的な快楽を愛する。自分の利益のためには真実をねじ曲げる。そういう人々が力を持ってしまった教会の中で、指導者であるテモテが非常に苦しみ、疲弊している――そういう話が獄中のパウロに聞こえてきました。そこでパウロは何とかテモテを励ましたいと願って、祈りつつこの手紙を書いたのです。

パウロはテモテのことを以前からよく知っていました。パウ

ロは今日の箇所で、テモテに対して聖書に立ち戻るように、聖書の持つ力に信頼するように勧めました。

「だがあなたは、自分が学んで確信したことから離れてはなりません。あなたは、それをだれから学んだかを知っており、また、自分が幼い日から聖書に親しんできたことをも知っているからです。この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。」

テモテへの手紙Ⅱ 3:14-16

テモテ、あなたは幼い日から聖書に親しんできた。その聖書に信頼しなさい。聖書から神の力と導きを得なさい。そう強くパウロは勧めるのです。

それではテモテは聖書（わたしたちの言う旧約聖書）のどのような箇所に親しんできたのでしょうか。聖書のどんな言葉から力を得てきたのでしょう。具体的なことは何も書かれていません。しかし想像してみましょう。それは、たとえば今日ご一緒に聞いた旧約聖書の言葉です。有名な話なのでテモテはよく知っていたはずです。

まず創世記第32章のヤコブの物語です。今日の場面から約20年前、ヤコブは双子の兄エサウの憎しみを買って、殺される危

険を感じるほどの事態でした。それで母リベカの勧めに従い、母の兄ラバンのところに身を寄せて、苦労の末、二人の妻と二人の側女、11 人の子どもたち、また家畜など多くの財産を得ました。そして 20 年ぶりに家族を連れて故郷に帰って来たのです。

けれども懐かしさよりも恐怖が先に立ちました。なぜかと言うと、あの兄のエサウの怒りがまだ解けていないのではないか。ヤコブは先に使いを遣わして兄エサウに挨拶させました。自分が帰ってきたことを伝えさせたのです。すると使いが帰ってきて言いました。「兄上エサウ様は 400 人を連れてお迎えに来られます。」

400 人！　ヤコブは顔面蒼白です。兄エサウは自分を殺そうとしているのではないか。

ヤボクという川の渡しに来ました。ここでヤコブは必死で神に祈りました。そしてエサウへの莫大な贈り物を用意して先に行かせ、また家族を導いて川を渡らせました。けれども自分は独り後に残りました。恐怖で足が動かないのです。こう書かれています。

「皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうとヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。」創世記 32:24-25

これは、一晩中、神と格闘するように必死で祈ったというこ

とです。神さま、助けてください。わたしの命を守ってください。兄エサウと和解させてください。兄を深く傷つけ怒らせたわたしの罪を赦してください。わたしを祝福してください。あなたがかつてわたしに約束してくださったように、わたしを守り、わたしの家族を守り、祝福してください。

夜明け前、格闘している相手が言いました。

「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」

「いいえ、祝福してくださるまでは離しません」32:27

ヤコブは神をつかんで離そうとしませんでした。ついに神はヤコブを祝福されました。それでようやくヤコブは心が定まって、ヤボクの渡しを渡ることができました。そしてその後、兄エサウと再会し、共に涙を流して和解することができたのです。

ふと思い出します。もう 50 年も前、わたしが神学校へ行くかどうかで迷い悩んだ頃、とてもお世話になったある司祭がこの話をわたしにして、「一生のうち、一度か二度、そのように神さまと格闘をしなければならないことがあるかもしれない」と言われました。振り返ってみると、ほんとうにそうだったと思い当たることがあります。

今こそ、テモテは神さまに必死で祈って、格闘して、そして祝福と平安をいただく時なのかもしれません。

もう一つは、今日ご一緒に唱えた詩編121編です。これもテモテはよく知っていて、礼拝でも唱えていたでしょう。祈祷書の訳で読みましょう。

1　目を上げて、わたしは山々を仰ぐ‖　わたしの助けはどこから来るのか
2 わたしの助けは主から‖　天地を造られた主から来る
3 神はあなたの足を堅く立て‖　まどろむことなく守られる
4 イスラエルを守る方は‖　眠ることもまどろむこともない

神があなたを守っておられる。あなたを守られる神は、眠ることもまどろむこともない。神が夜通し起きてあなたを守っていてくださるのだから、あなたは安心して、神さまにすべてをまかせて、やすみなさい。

7 主はすべての災いからあなたを守り‖　命を支えられる
8　主はあなたの出ると入(い)るとを守られる‖　今より、とこしえに至るまで

主なる神は、あなたが寝床から出るときも寝床に入るときも、あなたが家を出るときも入るときも、何かを始めるときも終えるときも、あなたのすべての時を守られる。今から後、とこしえに至るまで。

パウロの促しによって、テモテは、幼い日から自分が親しんできた聖書の物語、聖書の言葉にもう一度出会い、新しい力を

与えられたのではないでしょうか。現実を見れば果てしない困難。解決不可能な難題。どうすることもできない自分の無力を感じます。けれども聖書に希望があるのです。聖書をとおして語りかけてくださる神が、彼のために生きて働いてくださるのです。

今日の福音書でイエスは、弟子たちに対して「気を落とさずに絶えず祈り続けるように」と言われました。「神があなたがたを放置されるはずがあろうか」と言われました（ルカ 18:1､7)。

今日の聖書の言葉は、テモテだけに与えられた言葉ではありません。わたしたち一人ひとりに与えられている言葉です。聖書はわたしたちを救う力を持っています。わたしたちも聖書から慰めと励ましを受けたい。聖書をとおして、生きておられる神の呼びかけを聞きたいと願います。

3 神はあなたの足を堅く立て‖　まどろむことなく守られる
4 イスラエルを守る方は‖　眠ることもまどろむこともない

詩編第 121 編の 5 節から 8 節まで、ご一緒に唱えて心に刻みましょう。

5　主はあなたを守り、近くにいまして‖　その影はあなたを覆う

6 昼、太陽はあなたを撃つことなく‖　夜、月もあなたを撃つことはない
7 主はすべての災いからあなたを守り‖　命を支えられる
8 主はあなたの出ると入るとを守られる‖　今より、とこしえに至るまで

どうか神さまが、このとおりにしてくださいますように。アーメン